

最澄『依憑集』について

田村 晃 祐

第一項 序

『大唐新羅諸宗義匠依憑天台義集』は、最澄の『守護国界章』にその名が引用されており、最澄・徳一論争の最も初期のものの一つと考えられる。しかし、この書の成立については、大きな問題がある。それは、本文の後に続けて後序ともいふべきものが述べられ、最後に、

弘仁四年癸巳九月一日(Ⅲ三六五)

と記されて、弘仁四年(八一三)の撰述であることが知られる。

所が、本書の初めに別に序文が附せられていて、ここには「弘仁七丙申之歳也」と記されていて、両者の間に三年の隔りがある。この間の相違について、

一、弘仁四年著と考えるもの。

① 弘仁七年の年記は後人の竄入と考える。(三浦周行博士³)

② 弘仁四年集記、弘仁七年発表と考える。(塩入亮忠教

二、弘仁七年著と考えるもの。

③ 弘仁七年と考え、弘仁四年については言及なし。

(上杉文秀教授³)

三、両年時を単に併記するもの。

④ 両説を記し、相違の考察なし。(大屋徳城教授³)

と、諸説あり、その間、定説と見るべきものはない。

④の説については、改めて述べる迄もない。ただ、この両説の間の相違を考える必要があることを強調すれば足る。③の説は、弘仁四年の序には全く言及のない以上、単に参考にする以外に仕方があるまい。

①の説については、問題は、もし弘仁七年の年記のみならず、序分がわざわざ附されていて、その序分の最後に、記されている年時であるので、もし後人の竄入であるというなら、恐らく、序分全体をも否定しなければならなくなる。

そうすると、何故この序文、年時が後に加えられねばならな

かつたか、が説明されなければならないであろう。後に、後記があり、特に必要とは考えられないのに、何故附されたか、何時頃附されたかは、困難な問題である。これが説明されなければ、この説は確立された説とは言えないであろう。

②の説は、最も適切にこの二年時の調和を図つた説と評し得るであろう。が、この説を確立させる為には、弘仁四年に書かれたものが、何故発表されずいたか、弘仁七年、それも東国から帰山後に、何故改めて発表されねばならなかつたか、一体当時発表するとは、どのようにすることであつたか、誰に対して発表したのか、何故、その時弘仁四年の後記及び年時をも、そのまま附けたまま発表したのか、等という疑問が湧いてくる。

以下、このような疑問を考慮上におきながらこの問題について考えてみたい。これについて考える方法として、それぞれの時期が最澄がどのような状況にあつたか、という点から考察してみたい。

第二項 弘仁四年撰述説

最初に、弘仁四年とは、最澄にとつてどのような年であつたか、この年に書かれたとする可能性はあるか、執筆の動機は何であつたか等を考えてみたい。

延暦二十四年（八〇五）中国から帰つた最澄は翌二十五年（八〇六）年分度者の天台への割当てを天皇に乞ひ、南都僧

綱の賛成を得て、これが実現され、天台宗が公認の一宗として確立されたのが延暦二十五年（八〇六）正月二十六日であつた。所が、最澄の最大の外護者といつてもよい桓武天皇が同年三月十七日には崩ぜられ、平城・嵯峨天皇が帝位に即ぐに及んで、最澄にはいろいろな意味での苦難がかかつてくるようになった。

その具体的な問題の一つは弟子養成の問題である。年分度者二名の允許が降りてから弘仁四年（八一三）迄は七年経過し、大同二年（八〇七）から始まつて順調にいけば、十四名の天台僧が育つている筈である。所が、弘仁四年の時点で、得度した僧十四名の中、何人叡山に残つていたかは分からないが、後に、大乘戒問題が大きくなつてから作られた『天台法華宗年分得度学生名帳』（一二五二）によれば、この十四名中、住山せるものは僅かに四名、他の十名は、すべて叡山を去つてしまつた。勿論これ等の不住山の僧の中には、弘仁四年の時点では住山し、その後の数年の間に山を降りた者もいようから、弘仁四年の時点ではこれ程ではなかつたかも知れないが、とに角、これは最澄に危機感をもたせるには十分な事象だつたのではなからうか。特に、不住山の十名中、法相宗へ走つた者が、四名に上つた事は大きな打撃であつたであらう。

普通、空海との仲違いの原因となつたといわれる泰範の間

題も、実は、泰範の離山の問題が出発点である。泰範はもと元興寺の僧で、叡山に上つて最澄の下、叡山仏教の開創に力を尽し、最澄また多くの弟子の中で特に信任し、大同五年

(八一〇) 最澄病中の事務一切を任せられた。弘仁三年(八

一一) 最澄は病に臥し、五月八日遺言を作つたが、その時、

泰範は、山寺の総別当に任せられ、文書司を兼ねしめられて

いた。最も高い地位を与えられていたのである。このような

最澄の信任にも拘らず、泰範は山に居ることを好まず、その

翌月、弘仁三年六月二十九日に、最澄に書簡を送り、暇を乞

うた。「泰範常破戒意行。徒穢^ニ清浄業。……暫制^ニ心一処^一。

懺^ニ悔罪業。謹請^レ暇」(V附一三六)というものである。三浦

周行教授は、「泰範の請暇は、彼が山に在るの日、同法より

破戒の罪事を挙げて排斥せられしに非ざるか」という。しか

し、これより先、弘仁二年にも、泰範は法華の講に堪えず、

と辞退したことがあり(V附一三六)泰範離山の真相が何であ

つたかは、容易に分かからない。空海に近づいたのはこの請

暇の後であつて、近江の高嶋にいた泰範(V四六三)は同年

十二月、高雄山寺で、最澄と共に胎藏界灌頂を空海より受け、

以後、密教研究をなすようにとの最澄の付嘱を受け、円澄・

堅栄と空海の下に止つたが、泰範のみは遂に叡山へ帰らなかつたのである。そして弘仁四年六月十九日、即ち、『依憑

集』後記の日付、九月一日の約七十日程前の泰範宛最澄書簡

(V四六四)には「被棄老同法最澄」と署名してあつて、すでに泰範が、最澄の許から空海の所へ移つたのは明らかであつた。

塩入亮忠教授はこの頃の最澄の苦境を要約して、桓武天皇の崩御、右大臣で叡山仏教の庇護者であつた神王の薨去、和氣弘世の死去、年分度者の争奪、好意をもつていた勤操さえ南都の疑雲を散することをすすめたような、南都との間の暗雲、などを挙げ、最澄は桓武天皇崩御から約九年間、沈黙と研鑽の修道生活に入つた、と記している。

以上述べた様な状況が、弘仁四年頃の最澄の状況であつた。一言でいえば、折角、桓武天皇によつて公認の一宗とされた天台宗も、内外の諸要因によつて、大きな危機に見舞われ、その上最澄自身の、死を覚悟した病の後であつたのである。こうした時代背景の下に、『依憑集』の内容を考えて見る時、最澄は、天台の存続を願つて、天台が実は、奈良諸宗——律・三論・法相・華嚴——と、新来の真言宗等によつて高く評価され、影響を与えている教理をもち、更に、最澄自身の表現によれば、依憑とさえなつている宗であることを記し、特に弟子達に、自宗の優越性を深く認識させようとの意図をもつたことは、大変自然なことであるように思われる。弘仁四年の後記には、結論として、他宗への批判は含まずにただ天台の優秀性のみを記して、「唯敬信^ニ於義理^一。寧^ニ誇^ニ人

法「招殃哉」(Ⅲ三六三)「伏願。有心君子。放_二愛憎之情_一。熟察_三諸宗之憑_一。」「詎捨_レ福慕_レ置者哉。願同見_三於一乘_一。俱入_二於和合海_{一也}」(Ⅲ三六四)と、やや受身の記述に終り、俱に和合の海に入らん、と願いを述べている。こうして見ると、弘仁四年九月撰述は信すべきものであるように思われる。そして勿論、この時点で、徳一に対する批判という要素はもつていなかった、と考えられる。

第三項 弘仁七年説

弘仁四年に撰述された『依憑集』に、何故弘仁七年の序がついているか、は困難な問題である。これには、後人の竄入説と、弘仁四年集記、弘仁七年発表説とがあることを記した。

では、弘仁四年集記、七年発表説はそのまま認められるだろうか。これには、次のような疑問が与えられるだろう。

第一は、前節において見たように、弘仁四年にこのような書を集記する必要性があつて書かれたものが、単に集記しただけで発表しなかつたとすれば、その理由は何であつたか。

第二に、もし、弘仁四年は集記だけに終つて、発表されなかつたとしたら、何故、内容的には、重複の嫌ある弘仁四年の後記をそのままにして発表したのか。また、弘仁七年になつて発表した理由は何であつたか。

こうしてこの問題は、むしろ何故、弘仁七年という時点で改めて序が付されなければならなかつたのか、という疑問に要約出来る。

次の竄入説もまた、同様である。これを成立させる為には、何故に、後記と別に序が付されているのか、七年に特に序を附して発表する意味はなんであつたのか、という疑問に到達する。そこで、改めて弘仁七年の最澄の状況について検討してみたい。

二

仁忠『叡山大師伝』によると、

六年秋八月。縁_二和氣氏請_一。赴_二於大安寺塔中院_一。闡_二揚妙法_一。(中略)適講筵竟本願所_レ催向_二於東国_一。(V附三〇—一)

と記されていて、弘仁六年秋八月、大安寺で天台の教義を説き、南都の諸大徳と論争をまじえて、一乗の義を主張し、三乗の説を摧折し、講筵が終ると、直ちに東国へ赴いたように記している。東国には、すでに、最澄が若年にして叡山で修行中、一切経の書写を助けてくれた鑑真の弟子、道忠の系統の僧が、広智を中心とした相当大きな天台教団を形成しており、そこを初めて訪れたのである。この『叡山大師伝』の記述に従つて、例えば三浦周行教授も、最澄は、弘仁六年の夏から、弘仁七年の初めにかけて東国へ旅行して弘仁七年三月二十日頃迄には、叡山へ帰つたものを考え、多くの最澄の伝

記もこの説に従っている。

所が、この時最澄に同行したと見られる東国出身の僧の伝記などを見ると、弘仁八年の三月六日に下野の大慈寺で徳円に法を付し、同じ日徳円及び円仁に円頓菩薩大戒を授け、五月十五日には上野の緑野寺で、円澄と広智に両部灌頂を伝授している。また、叡山俗別当大伴宿弥国道の「天台仏法流布吾朝事」に「以弘仁八年^一為^二令^三一切衆生直至^四道場^五。結^六縁八島之内。奉^七写^八法華經六千部。」という記事もある。これ等の史料を綜合して、藺田香融教授は、最澄が東国を旅行したのは「實際は弘仁七年夏から翌年夏にかけて巡化されたものと推定したい。」と述べる。私も、この見解に同意したい。すると、弘仁七年には、半年近く最澄は東国に赴いていたことが分かる。

そこで、この『依憑集』の弘仁七年の序分は、一体、叡山にまだ居た時に書かれたものか、東国で書かれたものか、という疑問が起こる。この疑問に対しては、残念ながら、単に弘仁七年という年が記されているのみで、月日が記されていない為に決定的な答えを出すことは出来ない。

三

弘仁七年の序分は概要、次のようなものである。天台の伝法は諸宗の明鏡であり、諸宗の証拠となすものである。所が日本の天下に円機熟して円教が起つたにも拘らず、「天台の

四教は外道の説なるべし」とか「新羅大唐に咲う所の疏である」とか批判しているので、今諸宗の依憑を示す文を集め、後代の亀鏡とするのである。「新來の真言家は筆授の相承を派し、旧到の華嚴家は影響の軌模を隠し、沈空の三論宗は彈呵の屈恥を忘れて称心の心酔を覆い、著有の法相宗は僕陽の帰依を非して青竜の判経を撥す」と、三論・華嚴・法相の、南都六宗の代表的なものを攻撃し、更に新來の真言をも非難する。そして、最澄の天台には所承あり、菽と麦の異りを示し、目と珠の区別を悟っている。そこで『依憑集』を著して同我の後哲に贈る。弘仁七年。という。

この序分の、弘仁四年の後記と最も異なる点は、弘仁四年の後記は、天台の優位性を示すのに止つていたのに対し、ここでは他宗に対する批判が、はつきりと示されている点である。南都と空海に対する批判は、この当時の最澄の立場を考えれば肯けるものがある。

すなわち、南都に対しては、弘仁五年正月、宮中で諸宗の法師と対論し（V附二九—三〇）、また、翌六年には、和気氏の請で、大安寺の塔中院に天台を講じて、南都の諸大徳と対論している。

時有三諸寺強識博達大徳等。集三會法筵。巍巍智竜。興三重雲於秋風。赫赫義虎。解三厚冰於夏日。或争学或競論。或呼三客作。或索三証文。（中略）三乘鋒楯。於是摧折。一乘法燈於是熾烈。

と『叡山大師伝』(V附三〇—)とその模様を記しているが、天台と南都の教学をめぐる、一乘三論の論争となつて、互に主張し、その証拠を求め、激しく論争した有様が美事に描写されている。また、空海との間にも、弘仁四年秋から意志の疎通を来し、最澄の乞に応じなくなつて来ていた。こうして、最澄の天台宗の地位は日本の仏教界において孤立化の様相が徐々に明らかとなり、最澄は、これに対し、はつきりと批判的態度をとつて自宗の根拠を示し、存在理由を対外的にも明瞭にする必要にせまられていた時期である、と考えられる。

第四項 結

このようにして、私は、『依憑集』は屈折した性格をもつ書である、と考へる。最初は主として、自宗内において、天台の優位性を示す必要があつて書かれた書物であつたものが、その後の最澄をめぐる状況の変化に應じて、他宗批判という性格をも付与されて、弘仁七年、主として対外的に公けにされたものと考ええる。こうしてみると、序文が中央で書かれたか、東国で書かれたかということよりも、その対外的な姿勢自身が大きな問題となつていくであらう。

しかし、いずれにしても、このような『依憑集』の性格は、東国における徳一への批判という性格を持つに至つたことは、『守護国界章』の中で、本書に言及していることから

最澄『依憑集』について(田村)

明らかである。弘仁七年東国へ赴いて、これにも、会津の徳一が、天台教団に対して批判的であつたことを知つた最澄は、恐らくは東国の天台教徒を安堵させ、徳一への批判として、本書を使用したに相違ない。

こうして、本書は、最澄・徳一論争の経過からいふと、この論争に先行するもので、本来その為に書かれたものでなかつたものが、徳一批判の書として使用された、ということにならう。

- 1 註伝教大師全集第二卷四一四頁。以下単に巻数をローマ数字頁数は漢数字で記す。
- 2 三浦周行『伝教大師伝』二五三・四頁。
- 3 塩入亮忠『新時代の伝教大師教学』一八八頁。
- 4 上杉文秀『日本天台史』二一五頁。
- 5 大屋徳城『日本仏教史の研究』二〇七・八頁。
- 6 三浦周行、前掲書一八九頁。
- 7 塩入亮忠、前掲書二二一—二五頁。
- 8 拙稿、道忠とその教団(昭和四十一年度二松学会大学論集)。
- 9 三浦周行、前掲書二〇三頁。
- 10 『智証大師全集』下卷二一九四頁。
- 11 『慈覚大師伝』続群書類聚十八輯所収。
- 12 『相承血脉譜』天台霞標二の二所収。
- 13 藺田秀融「最澄の東国伝道について」(仏教史学第三卷第二号)。